

2011 年 12 月 7 日の語学教育に関する会議の報告書

2011 年 12 月 7 日にリセの初等科の語学教育に関する会議が開かれました。学校側からは初等科の校長ドパリス氏、語学教育コーディネーターのロベール・イチエ氏、2012 年 1 月にロベール・イチエ氏のポストを引き継ぐジャフレ氏、日本語教師のダボヴィル氏が、そして、APE-FAP からサンティーニ氏、AF-FCPE からブランクール、保護者の中から JLM（日本語を母語とする子供向けの日本語）教育に関する要望書を提出した田中氏がこの会議に出席しました。

まず学校側から初等科における言語教育の現状について説明がなされ、これまでの成果として次の点が強調されました。英仏バイリンガルクラスの設置、フランス本国の基準と比較した場合の時間割と達成目標に関する語学教育の強化（この点については後述します）。

学校側が説明した論点は以下の通りです。

日本語のコーディネーター

ーリセでの日本語教育にはコーディネーターが不可欠だといえるだろう。反対に、初等科のための専属の日本語のコーディネーターは必要ないだろう。

英仏バイリンガルクラス

ー英語とのバイリンガルクラスには、現在、専任の教員が二名ついている（二人の教師が教えるフランス語のみのクラスは廃止）。しかしながら、言語教育のコーディネーターにジャフレ氏が任命されるため、実際には彼女が担任の CM1 のクラスでは二人の教師が教える状況が再び生まれることになる。

ー学校側は第 6 学年になった時に仏英バイリンガルクラスをどうするのかについて検討している。現在、検討中。

JLE（外国語として学ぶ日本語）教育

ーJLE に関して、学校側は月単位での学外教育プログラムが組織されていることを説明した。一例として、CM1 では街の精肉屋への社会見学がすでに実施されている。日本の実社会とのつながりを持とうとする意図はあらわれている。絶えずこのような試みが実現されることを望んでいた AF-FCPE は、このプログラムを支持し、評価する。学生は、このよ

うな試みによって、自分たちの学習の意義——書かれたものだけから文化を学ぶのではなく、そこから抜け出して、現実のコミュニケーション能力を養うこと——をよりよく理解することができるに違いない。今後、生（なま）の日本語に触れるという方針にしたがつて授業は進められる。学外へと出かけることは授業の合間のレクリエーションというだけではなく、教育的な時間でもある。

ーリセが提示する数字によれば、JLE を受けて東京の中学校に入る子供は、大部分が完全に JLE を止めるという選択肢があるにも関わらず、JLE を継続している（週 1 時間だと思われる）。リセはもちろんこの事実を賞賛し、JLE が上手く機能していることの証拠だと主張した。

初等科修了時の語学の成績評価

ー初等科修了時の成績評価については、フランス国内の評価基準に基づいている（英語に関しては、フランス国内の評価基準。日本語に関しては、EN（Education nationale：フランス教育文化省）が行う試験が無いのでリセの教員が評価基準を作成している）。

言語教育の再編成計画（検討中）

ー保護者のさまざまな期待に応えるべく、学校側は英語教育と同じくらいの成果を日本語教育でもあげられるよう第 3 課程（CE2 以後）の再編に取り組んでいる。大まかに言えば、すでに 6 月と 9 月の学校評議会で告知されていたように、3 つの形態が提案されている。

- 3 時間の英語 1 時間の日本語（JLE）
- 2 時間の英語 2 時間の日本語（JLM と JLE）
- 1 時間の英語 3 時間の日本語（JLM）

これに加えて JLM に関しては、2 年目の終わりか、1 年目の終わりのどちらかに、1945 個の漢字を習得できるような案が出されている。

現在の枠組のままで（第 3 課程での 4 時間の語学教育。EN の基準よりも 2 時間半多いことになる。AEFE＝海外フランス教育庁の特例として 1 時間半が与えられており、30 分はフランス語にあてられる）、つまり、バイリンガルセクションを設置することなく、リセが現行の語学教育の内容を改善するための努力を試みていることは評価できる。とりわけ、内容を多様化し、JLM のために少しでも良いものを提供しようとしている。

仏日バイリンガルセクションに関する質問

AF-FCPE は、随分前から間もなく実施されると告知されている仏日バイリンガルセクションの設置計画について、当然のことながら、その今後に関する質問を行った。例えば、リセの移転にともなって行われるべきではないか、と質問した。学校側はこの計画は断念してはいないが、目下のところ中断されていると説明した。学校側は仏英バイリンガルクラスの成果がまだ見えていない段階で、大きな計画を動かすことに慎重になっている印象を受けた。

また、仏日バイリンガルクラスの設立が多くの子供の期待に応えるものではないか、特に子供の日本での就職を考えている大部分の仏日家族の期待に応えるものではないか、という AF-FCPE の質問に対して、学校側はリセがこの計画を実行するのにふさわしい場所とはいえ、日本での就職に備えるには日本の教育システムを利用することを推奨すると回答した。この回答には驚きを禁じえない。この回答には、日本社会に対する過小評価の姿勢があらわれているように思われるし、また、仏日ハーフの卒業生たちの多くは、二つの文化の学習のおかげで日本での就職に成功しており、事実はこの回答とは反対の結果を示している。リセ・フランコジャポネは、子供たちが、とりわけ、二重の文化的アイデンティティをもつ子供たちが、その二重の豊かさを育み、その豊かさから利益を得られるような場所であることが肝要だと思われる